

『元朝秘史』における anda 概念

－王罕・ジャムカ・チンギスの非明示的な三者関係を基に－

藤井 真湖

要旨

『元朝秘史』におけるアンダ anda の関係といえば、チンギスとジャムカの関係やチンギスの父イェスゲイとケレイト集団の王罕の関係が有名である。一般に、anda 関係は、二人の勇者のあいだで交わされる親密な関係性だというように解されている。しかし、anda 関係はもう少し含みのある概念であるように思われる。秘史においては、チンギスの正妻ボルテがメルキト集団に略奪されたさいに、王罕－ジャムカ－チンギスの3つの部隊が結集してボルテを救出するという事件が叙述されているが、この事件における軍の結集のされ方についてよく観察すると、三者の意外な関係が立ち現れてくる。この三者関係の考察を基に、本論では新たな anda 概念を提起することになる。

1. 本論の目的と議論の流れ

1.1. 本論の目的

本論は、『元朝秘史』（以下、秘史）を“英雄叙事詩”と位置づけ、そこにおける非明示的なアンダ(anda)概念を提示しようと検討する試みである。秘史の §117 には、アンダ(anda)関係が次のように説明されている。

古の翁人の言を聞いて、『アンダである人は、命は一つ、お互いに棄てることなく、お互いに命を守り合う人である』といて、親しみ合うのであった。

この部分の叙述にのみ基づけばアンダ（以下、anda）関係にある者には“親しさ”が含意されているように見える¹⁾。しかし、秘史における anda は、もう少し含みのある語として用いられているのである。すなわち、“明示的には友好関係、非明示的には一時的な休戦関係”という、対照的な意味をもつ用語となっているのである。そしてさらには、この語の登場するエピソードにおいては、anda は明示的には勇者間の友好関係を表しながら、非明示的には敵対関係を示すという、二重性がつきまとっているのである。本論では、anda のこうした非明示的の意味を提示することを目的とする。

1.2. 議論の流れ

まず、最初に、2. においては、秘史に現れるすべての anda の箇所を出現順に一覧する。その上で、anda という語（実際には anda を基にした派生語や動詞も含む）が、限られた人々にしか用いられていないことを指摘する。これらの anda と呼ばれる関係の人々を次に7つ

のグループに分ける。さらに、これら7つのグループをA～Dまでの4つのグループに分ける。続く3. においては、これらA～Dまでのグループごとに順に考察をおこなう。とくに、Aで導き出した anda の仮説は、その他B～Dまでの考察にそのまま援用される。

Aグループは、(i) チンギスージャムカ関係、(v) ジャムカーチンギスー王罕関係 (vii) 王罕ーチンギス関係である。この場合、チンギス、ジャムカ、王罕は絡み合って登場するので、この三者をひとつのグループとして括っておいた。Aグループの考察では、まずこれら明示的に示された三者関係を物語に沿ってまとめる。次の議論においては、メルキトに略奪されたボルテ夫人の奪還に関わる三者の叙述に着目することによって、チンギスージャムカ関係と、チンギスー王罕関係における非明示的な関係をそれぞれ明らかにする。

この議論の詳細は省くが、議論の見取り図として、三者関係は次のようなものであることだけを記しておく。その三者関係とは、三者が対等ではなく、チンギスよりもジャムカ、ジャムカよりも王罕の政治的権力が大きいということである。この考察においては、チンギスとジャムカ関係についていえば、ジャムカはイエスゲイの死後、イエスゲイの遺民を吸収していたことが明らかになる。それゆえ、ボルテ夫人奪還後に、チンギスとジャムカの間にこの遺民の帰属についての争いが再燃したことが必然であったこと、とはいえ、両者はただちには敵対関係には入らず、いったんは anda の儀礼を結ぶことによって、直接対決は避けたことに言及する。このことを踏まえ、**anda の儀礼をすることとは、勇者間の勢力関係が微妙なものになった際に、一時的な紳士の休戦協定を取り結ぶ意であった可能性を提示する。**

続く4. においては、Aグループで導き出した anda 仮説に基づいて、BグループとCグループの考察を順におこない、この仮説を適用しうることを確認する。Bグループは、イエスゲイー王罕関係とチンギスーセングム関係である。Cグループは、ジャムカをカ(qa)に推戴した諸集団の武将たちの関係である。5. においては、最後の anda の下位グループであるDグループを考察する。Dグループは、チンギスークイルダル関係である。このDグループは一見したところ、A～Cまでのグループとは質を異にしているように見えるが、実際には、やはりAグループで導き出した anda の仮説を適用しうることを示す。最後に、結論となる6. においては、本論の要点を簡潔にまとめる。

2. 秘史における“anda”の検討

秘史においては、anda あるいは、この名詞をもとにした動詞が計99回用いられていることが確認できる。それを表にすると表1のようになる。下記は、栗林均編『「元朝秘史」モンゴル語 漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』(2009)に基づいて作成したものである²⁾。なお、本文における秘史の邦訳は基本的に1984年から1989年にかけて刊行された小沢重男『元朝秘史全訳』3巻及び『元朝秘史全訳続攷』3巻(風間書房)に基づいているが、人名・地名その他のカタカナ表記は若干異なっていることがあることを断っておきたい。

〈表 1〉秘史における anda の出現場所

番号	巻・§	回数	出現する文脈	備考
(1)	巻 2 § 96	3	チンギスがクロテンのコートを王罕に贈呈したさいに交わす、チンギスと王罕の会話の中でチンギスが、昔、王罕とチンギスの父イエスゲイが anda であったので、王罕は自分の父のようなものだと言う。	anda ke'eldü-ksen 3 回
(2)	巻 3 § 104	1	チンギスが王罕にボルテ奪還の依頼に行った際に、王罕が前回チンギスと交わした発言に言及する言葉の中で。この節は § 96 のことを繰り返している内容で、前回と同じ箇所であら anda が用いられている。	anda ke'eldü-ksen
(3)	◇ § 105	3	王罕からボルテ奪還の救援を取り付けた後、チンギスが王罕の言葉をジャムカに伝えさせる時にジャムカのことを。この王罕の伝言を聞いたジャムカがチンギスに同情してボルテ奪還に加わることを表明した発言の中でチンギスのことを。	Jamuqa anda 2 回, Temüjin anda 1 回。
(4)	◇ § 106	4	§ 105 に続く内容。ジャムカが自分の軍を 2 万、王罕軍とポトガン・ポオルチ (地名) で合流することをチンギスに伝えさせる発言の中で 4 回チンギスのことを。	Temüjin anda 2 回, anda 2 回。
(5)	◇ § 108	1	ボルテ奪還軍が合流するポトガン・ポオルチにジャムカだけが先に到着し、チンギスと王罕軍が 3 日遅れて到着したさいに、ジャムカがその遅れたことを非難する発言の中で。	Andaqartan
(6)	◇ § 110	1	ボルテ奪還後、チンギスが王罕とジャムカにボルテを奪還したので下宮すると伝えてよこすさいの言葉の中でジャムカのことを。	Jamuqa anda
(7)	◇ § 113	1	ボルテ奪還のための援軍を送ってくれた王罕とジャムカにチンギスが感謝して言う発言の中でジャムカのことを。	Jamuqa anda
(8)	◇ § 116	8	ボルテ奪還後にチンギスとジャムカが 2 度目の anda の誓いをするさいに、1 度目の anda の儀礼を回想する叙述の中で。	anda 8 回 (anda bolulča-qsan, anda tungquldu-ju, anda bolulča-run, anda bolulča-ju, anda ke'eldü-ksen, anda ke'eldü-le'ei, andačilaldu-bai, ke'eldü-[k]sen)
(9)	◇ § 117	6	§ 116 の続きで、チンギスとジャムカが 2 回目の anda の誓いをするさいに。anda とは何かの明示的説明。	anda 3 回, Jamuqa anda 2 回, Temüjin anda 1 回
(10)	◇ § 118	5	ジャムカの言葉をチンギスがその真意をはかりかね、最終的に両者が別れることになる場面で、ジャムカがチンギスをテムジン・アング、また逆にチンギスが 1 回ジャムカをジャムカ・アングと。また、ボルテ夫人の発言でも 2 回ジャムカのことをジャムカ・アングと言っている。	Jamuqa anda 3 回, Temüjin anda 1 回, anda 1 回 (ジャムカがチンギスに呼びかける際に)
(11)	◇ § 125	1	チンギスがハーンになった後に、ポオルチュとジェルメに Jamuqa anda よりも自分を選んでくれたことを感謝した発言の中でジャムカのことを。	Jamuqa anda
(12)	巻 4 § 127	6	ジャムカがアルタンとクチャルに伝えるように言う言葉の中でチンギスのことを言及する時に。	Temüjin anda 2 回, anda 4 回 (anda-yin sübe'e, anda, anda-yin setkil, anda-da)
(13)	◇ § 141	1	ジャムカが西の年にカ qa に推戴されるさいに、ジャムカを推す諸集団が牡馬、牝馬を共に切って「盟約しあった」という叙述で。	andaqaldu-jü
(14)	巻 5 § 150	3	ケレイトの王罕から弟ジャカ・ガンボがチンギスのもとに仲間としてきた後、イエスゲイと王罕が anda となりあった経緯すなわち王罕がイエスゲイに助けられた説明の中で。	anda 3 回 (anda ke'eldü-ksen, anda ke'eldü-küi, anda bolulča-qu)
(15)	◇ § 151	1	§ 150 に続く箇所、チンギスが、窮状にある王罕を、かつて父イエスゲイと anda 関係にあったことを理由に救けたという叙述のなかで。	anda ke'eldü-ksen
(16)	◇ § 160	2	チンギスと一緒にナイマンと戦っている王罕が戦列を離れ、ジャムカと一緒に移動するさいに交わすジャムカの会話の中でチンギスのことを。	Temüjin anda 1 回, anda 1 回 (anda min-u)
(17)	◇ § 164	2	息子セングムをチンギスに助けてもらった王罕が、チンギスの父イエスゲイもかつて自身の窮状を助けてもらったことに触れる中でイエスゲイのことを。王罕とチンギスがハラ・トゥン (地名) において、かつて王罕がイエスゲイと交わした anda 関係に従って父子と言いつつあったという叙述の中で。	anda 2 回 (anda min-u, anda ke'eldü-ksen)

番号	巻・§	回数	出現する文脈	備考
(18)	〃 § 166	2	ジャムカがテムジンのことを。	Temüjin_anda 2 回
(19)	巻 6 § 170	5	ジャムカが発話の中でテムジンのことを。	anda 5 回 (anda-tur 3 回, anda qada'uci-tuqai, anda bü ayu=)
(20)	〃 § 171	2	チンギス陣営とケレイトとの戦いにおいて、マンガトのクイルダル・セチェンがチンギスのことを anda と言って戦うと主張したという叙述の中で。	anda 2 回 (anda-yin emüne, anda mede-tügei)
(21)	〃 § 177	3	チンギスの発話の中で、イエスゲイと王罕の関係を述べるさいに。	anda 2 回 (anda bolulča-ju, anda ke'eldü-ksen 2 回)
(22)	〃 § 178	1	王罕がチンギスに自分の指を切って送るさいに。	andaqa-ju
(23)	〃 § 179	1	チンギスがジャムカ・アングに言えと言って、ジャムカに使いをやるときに。	Jamuqa_anda
(24)	〃 § 181	6	チンギスの発話の中で王罕の息子セングムのことを 4 回、チンギスがジャムカのことを 1 回、チンギスに anda 呼ばわりされたことを否定するセングムの発話内で 1 回、チンギスがジャムカのことを 1 回。	Senggüm_anda 4 回, Jamuqa_anda 1 回, anda ke'en 1 回。
(25)	巻 7 § 195	3	ジャムカがナイマンのタヤン・カンに言うセリフの中でチンギスのことを。	Temüjin_anda 3 回。
(26)	〃 § 196	2	ジャムカが使者を遣ってナイマンのタヤン・カンの情報を伝言するさいにチンギスのことを。	anda 2 回 (anda-da, anda qada'uci=)
(27)	巻 8 § 200	4	ジャムカがチンギスに捕捉されたときに交わす両者の会話の中でお互いをアングと呼び合う。ジャムカがチンギスのことを 3 回、チンギスがジャムカのことを 1 回	anda 4 回 (anda-da, anda min-u 3 回)
(28)	〃 § 201	18	ジャムカの死。12 回はジャムカがテムジンのことを。1 回はチンギスがジャムカのことを。	anda 17 回 (anda-lu'a, anda ke'eldü-rün, anda-yiyan 2 回, anda-min-u 2 回, anda tögörigei, anda-yin 2 回, anda-ača, anda, anda sečen, anda-da 2 回, anda soyurqa-asu, anda jürüge-ben, anda soyurqa-ju), Jamuqa_anda 1 回。
(29)	〃 § 204	1	チンギスのモンリグ父への発話の中でセングムのことを。	Senggüm_anda
(30)	〃 § 208	1	チンギスが、ジュルチェデイに言う発話の中で、クイルダルに触れる際に。	Quyildar_anda
(31)	巻 9 § 217	1	§ 208 と同様に、チンギスの発話のなかでクイルダルのことを。	Quyildar_anda

表 1 によると、anda という語 (anda を基にした派生語や動詞も含む) は、比較的限られた人々にしか用いられていないということが判明する。興味深いのは、明示的には、イエスゲイとマンガトのクイルダルの事例は他とは事情が違うものの、ジャムカ、王罕、セングムというチンギスと敵対している人々はすべて最終的に滅んでいることである。

anda は個人を指示する語ではなく、関係性においてしか命名されないものであり、これに鑑みると、表 1 で示される anda 関係は、表 2 のような 7 つの関係に整理できる。表 2 に示されている関係の順番は、表 1 の対応箇所が多い順に拠っている。対応箇所が 1 箇所 (ひとつの節) しかない場合は、その箇所の出現順序に拠った。表 1 の (24) は、(i) と (iv) の別のカテゴリーをその中に含んでいるが、他の場合は、それぞれの節でひとつの anda 関係が示されている。

表 2 の (v) と (vii) については、若干補足する必要があるだろう。(v) は、表 1 の (5) に対応するとしているが、そこにおいては“anda の誓いのある者”という表現で出現している。これは、ジャムカが王罕とチンギスに向かって言っているもので、この表現で指示されているのをチンギスと王罕の二人と一応とらえて、ジャムカ-チンギス-王罕関係と整理しておいたものである。(vii) は、表 1 の (22) に対応するが、そこにおいては王罕がチンギス

に自分の指を切ってそれを送りつける際に“anda となして andaqa-ju”という動詞で出現している。送り手が王罕で受け手がチンギスであるので、この用法を王罕－チンギス関係としておいた。

〈表2〉7つの anda 関係に対応する秘史の表1の(1)～(31)の対応箇所

番号	具体的な関係性	表1の番号
i	チンギス－ジャムカ関係	(3), (4), (6), (7), (8), (9), (10), (11), (12), (16), (18), (19), (23), (24), (25), (26), (27), (28)
ii	イエスゲイ－王罕関係	(1), (2), (14), (15), (17), (21)
iii	チンギス－クイルダル関係	(20), (30), (31)
iv	チンギス－セングム関係	(24), (29)
v	ジャムカ－チンギス－王罕関係	(5)
vi	ジャムカジャムカをカハンに推挙した諸集団の武将たち関係	(13)
vii	王罕－チンギス関係	(22)

以下、これらの anda 関係をすべて考察するのであるが、これらの anda 関係の性格に合わせて、次のようなグループに分けて論じることにした。

- A グループ： i チンギス－ジャムカ関係, v ジャムカ－チンギス－王罕関係, vii 王罕－チンギス関係
- B グループ： ii イェスゲイ－王罕関係, iv チンギス－セングム関係
- C グループ： vi ジャムカ－ジャムカをカハンに推挙した諸集団の武将たち関係
- D グループ： iii チンギス－クイルダル関係

A グループの場合、ここで登場するチンギス、ジャムカ、王罕は絡み合って登場するので、この三者をひとつのグループとして括ることにした。じつは、この三者を論じることは、anda 議論における anda の概念の雛形となるので、以下では、まず A グループの考察をおこなうことにしたい。B グループは、(ii) チンギスの父イェスゲイ－王罕関係、(iv) チンギス－セングム関係であり、A グループの考察からある程度その質を推測できる anda 関係となっている。C グループは (vi) ジャムカをカ han に推挙した諸集団の武将たち関係で、これも A グループの考察からある程度その質を推測できる関係である。最後の D グループは、(iii) チンギス－クイルダル関係で、クイルダルは対ケレイト戦争で雄雄しく戦死するマンガト集団の勇者である。この人物との anda 関係の意味も、A グループの考察から引き出される。そしてこの関係性の意味が意外性を帯びているために、この考察はひるがえって A グループの考察の妥当性を逆照射するものとなっていくであろう。

結論を先取りすると、anda 関係とは、“いずれは対決することになるものの、結ぶ段階では休戦するために結ばれる期限付きの紳士協定”、もう少し簡略化して言えば、**明示的には友好関係、非明示的には一時的な休戦関係**ではないかという anda 概念を本論では提起した

い。Aグループの考察においては、この *anda* という仮説の根拠がまず導き出されることになる。

3. Aグループの考察：*anda* 仮説の構築のための議論

Aグループは、前述のように、(i) チンギス-ジャムカ関係、(v) ジャムカ-チンギス-王罕関係 (vii) 王罕-チンギス関係である。チンギス、ジャムカ、王罕は絡み合って登場するので、この三者をひとつのグループとして括る。順列組み合わせからいくと、ジャムカと王罕の関係があってもよさそうなものであるが、ジャムカと王罕は、秘史においては、一度も *anda* 関係として叙述されることはない。このことは特筆すべきことである。彼らの関係は、“兄弟”という用語で捉えられている。すなわち、§ 104において、メルキトに奪われたボルテ夫人の奪還のための救援要請を受けた王罕が、ジャムカを動員する旨をチンギスに伝える発言の中で、ジャムカのことを“*Jamuqa de'ü* (ジャムカ弟)”と3度も言及しており、また、ジャムカのほうも王罕のことを § 106で、“*To'oril_qan_aqa* (トオリル罕兄)”と言っている³⁾。両者がなぜこのような“兄弟”関係になっているのかは明示的には不明である。このことを重視すると、表2で *anda* 関係のひとつである (v) ジャムカ-チンギス-王罕関係は、実は成立しないことになる。つまり、(i) チンギス-ジャムカ関係と (vii) 王罕-チンギスのそれぞれが *anda* 関係になっている。ただし、(vii) の関係も一例しかないという意味で例外的であると言えるかもしれない。なぜなら、この事例以外では、チンギスと王罕の関係は、王罕とイエスゲイが *anda* であったことを理由に—これが論理的に自然なのかどうかはともかくとして—、明示的には終始“父子”関係として捉えられているからである。とするならば、Aグループの *anda* 関係の中核は (i) チンギス-ジャムカ関係であると位置付けることができそうである。

それゆえ、以下においては、まず (i) チンギス-ジャムカ関係が明示的にどのように描かれているのかを確認し、1例のみ存在する (vii) 王罕-チンギス関係が明示的にどのように描かれているかを整理してみたい。その後で、これらの関係の非明示的の意味を探ることにしたい。

3.1. 明示的に叙述されている、チンギス-ジャムカ関係とチンギス-王罕関係

(i) チンギスとジャムカの関係と (vii) チンギスと王罕の関係は、秘史における明示的な叙述に従えば、それぞれ最終的には決裂する関係となっていくものの、初期においては非常に良好なものとして描かれている。まずは、(i) における明示的な物語、とりわけ初期の良好な関係性から敵対的な関係に変質していくまでの流れを以下に確認しておく。

(i) のテムジンとジャムカの関係は、次のように理解されている。まず、テムジン/チンギス（以下ではチンギスに統一する）とジャムカは幼少のころに親しく (§ 116)、チンギスが妻ボルテをメルキトに奪われた際にはその奪還に助力をしたというところから (§ 105 ~ § 108, § 113, § 115)、チンギスの台頭していく初期において関係は悪くなかったように叙述されている。だが、ボルテを奪還したあと、約一年後、チンギスに投げかけられたジャムカの「謎の言葉」を契機に、その真意が確かめられることもなく、両者はふたつの陣営に

分かれることになる (§ 117 と § 118)。その後、チンギスがカハン（皇帝）に推戴された際、ジャムカがその報を伝えに来た使者に言う言葉をみても、チンギスに対して否定的な感情を持っていた形跡はない (§ 127)。チンギスとジャムカの関係が決裂するのは、ジャムカの弟タイチャルがサアリ草原にいるジョチ・ダルマラの馬群を奪いに行つて逆に殺害されてしまうという事件を契機にしてからである (§ 128)。

一方、(vii) チンギスとケレイトの王罕との関係についても、ジャムカと同様に、チンギスの初期の時代においては、良好な関係であったように叙述されている。その関係は、チンギスが許婚者のボルテを娶った後、その引き出物のクロテンのローブをチンギスが王罕に献上する出来事に始まる (§ 96)。その際、チンギスはかつてチンギスの父イエスゲイと王罕が anda 関係にあったことを思い出させ、父の anda は、チンギス自身にとっては父のような存在だと言う (§ 96)。これに対して、王罕は喜んで、イエスゲイ死後に散逸した人々を取り戻してやろうと約束する (§ 96)。そして、その後、妻ボルテをメルキトに略奪されたさいに、王罕に援助を乞いに行く (§ 104)。そして、王罕はジャムカも動員しながら、ボルテをメルキトから奪還する兵を出すことを引き受け、チンギスは、自分の部隊—実際は部隊などと言う規模ではなかったが—と王罕部隊とジャムカ部隊の 3 部隊でメルキトから妻ボルテを奪還することに成功する (§ 104, § 107- § 110, § 113)。

その後、ジャムカを支持する諸集団に qa に選出されたジャムカが、チンギスと王罕に出馬しようとする。この際に、ジャムカの動向を知ったチンギスが王罕に知らせると、王罕は急いで軍を率いてチンギスのもとにやってくる (§ 141)。チンギスと王罕は、協力してジャムカに進軍する (§ 142)。タタルへの出馬においては、王罕が戦利品をチンギスに分配しないという叙述が見え (§ 157)、両者の亀裂を予感させているが、まだ本格的なものではない。実際、ナイマンにも両者は一緒に出馬しているところを見れば (§ 158)、この時点では決定的な齟齬には至っていない。しかし、ナイマンとの戦闘のさなか、王罕は勝手に戦列から離脱しており (§ 159, § 161)、亀裂を生じさせるような行為をしている。しかしそれでもなおこの時点で致命的な齟齬は起きていない。チンギスは、ナイマンに略奪された王罕の息子セングムの妻子や民を、王罕に乞われて取り戻してやり、これに対して王罕が感謝しているからである (§ 163)。

両者の致命的な亀裂は、チンギスと王罕との直接的な関係からというよりも、王罕の息子セングムが原因で生じる。この亀裂は段階的に進む。まず、§ 166 においてジャムカがセングムにチンギスを讒言するという内容は両者の関係を暗示している。次に、両者の亀裂を促したのが、チンギス側と王罕側に取り交わされた縁組の破談である。チンギスは長子ジョチに、セングムの妹チャウル・ベキを娶わせようとするが、セングムが尊大な言動をして妹をチンギスに与えない。このことでチンギスの王罕への反感が芽生える (§ 165)。最終的に両者の亀裂を決定的にしたのは、セングムがチンギスを陥れようと、王罕を説得し妹チャウル・ベキとの婚姻を認めたふりをしてチンギスを宴に招待したことである (§ 168)。しかし、この謀略にチンギスはモンリク・エチゲの警告で乗らずにすむ (§ 168 ~ § 169)。2 度目の婚姻話が謀略の手段として使われたことで、チンギスと王罕の関係はもはや修復不可能の決裂をして両者は戦いへの道を突き進んでいくことになる。

以上のように、チンギスとジャムカの関係も、チンギスと王罕との関係も、最初は良好なものであり、時の経過による諸状況の変化により、その関係が崩れ、敵対関係に最終的に至ったかのように叙述されている。しかし、これはあくまでも明示的な叙述のレベルのことであって、非明示的にはまったく別の物語が存在していたのではないかと考えられる。

3.2. チンギスージャムカ関係とチンギスー王罕関係における非明示的關係

3.2.1. ボルテ奪還時の叙述における幾つかの疑問点

3.1. で示したチンギスとジャムカの関係、および、チンギスと王罕の関係は、よく見ると、それぞれ二者関係で終わらず、もう一人が関係していることが観察される。それゆえ、この二組の二者関係は各々別個に扱うのではなく、三者関係として取り扱うのがよいように思われる。

手始めに、この三者関係として着目したいのが、メルキトに急襲されて奪われるボルテ夫人の奪還のための軍事行動に関する叙述である。この叙述をよく観察すると、幾つかの素朴な疑問が立ち上がってくるが、その疑問を考察することにより、この三者の明示的關係とは全く異なる新たな関係性が浮き上がってくることを以下に提示したい。

その疑問点のひとつとして指摘したいのは、§106の叙述にもとづくと、メルキトに略奪されたチンギスの正妻ボルテ夫人を取り戻す応援を頼んだジャムカ陣営のなかには、チンギスの領民が実際には1万もいたと解釈できることである。問題の箇所である§106を詳しく見よう。ここでは、ケレイトの王罕から寄せられたボルテ夫人奪還の要請を受けてジャムカが応じ、ジャムカはメルキトへの出陣を雄雄しく表明している。ジャムカは、その表明をしたあと、チンギス陣営、王罕陣営、ジャムカ陣営が集結する場所を指定し、その各々の陣営の拠出する兵の数を次のように指示している。

我のここより出馬するとき、オナン河を遡り—andaの民人はここにあり—andaの民人より1万、我はここより1万、合わせて2万の兵となって、オナン河を遡り行き、ボトカン・ボオルチで合流しよう。

この箇所のみを見るのであれば、ジャムカはチンギスにそれぞれ1万ずつ兵士を出そうと提案しているようにも理解できるが、やはりこの2万を指揮しているのはジャムカのようにも理解できる。この箇所だけを見て、状況を理解するのは難しい。しかし、§108を見ると、ジャムカがこの2万を指揮していることを確認できる。§108の冒頭は次のようになっている。

テムジン、トオリル罕（王罕のこと—藤井注）、ジャカ・ガンボ（王罕の弟—藤井注）の3人は共にそこから移動し、オナン河の源ボトガン・ボオルチに至ると、ジャムカは約束の地に3日前に着いていた。ジャムカは、これらテムジン、トオリル、ジャカ・ガンボ等の軍兵たちを見て、ジャムカは己が2万の兵を整えて迎えたった。

上記の§108をみると、チンギスの兵士1万がジャムカの兵士として数えられていること

が観察される。つまり、§ ジャムカは、2万の兵士のうち1万をチンギスの兵士だと言いつつも、ジャムカはこの兵士たちを指揮していることになる。問題は、秘史にはなぜジャムカの陣営にチンギスの領民が含まれているかの理由は明示的に示されていないことである。なぜジャムカの陣営にチンギスの領民が含まれていたのであろうか。

第2の疑問点は次のようなものである。それは、チンギスが王罕にボルテ奪還の救援を頼んだ際に、王罕が、次のように発言することである。よく見ると、§ 104でも王罕は、チンギスにジャムカに伝えるよう次のように言っている。

汝はジャムカ弟に言葉を届けよ。ジャムカ弟はコルコナク・ジュブルにいるぞ。我はここより2万の兵で出馬しよう。我はここより2万の兵で出馬しよう右翼として。ジャムカ弟は2万の兵となって、左翼となって出馬するように。我らの落ち合う場所はジャムカが定めるように。

ここでは、何の前触れもなく突然ジャムカが王罕によって名指しされていることが観察される。この理由については、明示的には記されていない。このようなケレイトの王罕とジャムカとの関係は一体どのようなものなのであろうか。

このような2つの疑問は、次節のように考えると、理解することができるようになる。

3.2.2. 集団関係についての仮説

3.2.1. で述べた第1の疑問についてであるが、チンギスが支配すべき領民がジャムカという人物の支配下にいる。ということは、当然ながら、チンギスの領民の集団的移動があったことを示している。秘史の叙述を観察するかぎり、集団的移動という事態が起こったという内容が見えるのは、§ 106以前を見ると、§ 72と § 73以外に該当する箇所がない。§ 72では、タイチウドのタルグタイ・キリルトグ、トドエン・ギルテらがチンギス一家を放棄していくときにイエスゲイ遺民もそれに従って移動したと叙述されている。続く § 73では、チンギスの母=イエスゲイ夫人が、一部の人々を戻らせたとはいえ、戻された人々も落ち着かず、タイチウドの後を追って移動したと叙述されている。これらは、チンギスの父イエスゲイがタタルに毒殺された以降に起こった出来事として描かれている。

つまり、これら § 72と § 73で叙述された集団移動の次に叙述される集団移動に関わる内容が § 106における“ジャムカ陣営の中にいるチンギスの領民”への言及なのである。この叙述を論理的に理解するためには、チンギス一家を離れた人々はタイチウド集団についていき、この集団のどの程度かは不明なものの、ジャムカ陣営に入ったと考える必要がある。これが、先にあげた、第1の疑問すなわち“なぜジャムカの領民の中にチンギスの領民がいるのか”という疑問への回答となる。

むろん、この論理には、タイチウド集団とジャムカとの関係が結節点として必要であるが、これについての叙述は、メルキトからのボルテ奪還に関わる叙述の中には明示的に見当たらない。ただし、タイチウドとジャムカの親和性は、この節 (§ 106)よりずっと後の § 141でジャムカをカ qa に推戴する集団の中にタイチウドのタルグタイ・キリルトグがいることにおい

で確認できる。タイチウド集団とジャムカとの関係の叙述が欠落している背景については本考察のなかで明らかになってくることであるが、先取りしておく、ジャムカとチンギスの関係を最初の時点では良好なものとして描こうとしたからだと推測される⁴⁾。

重要なので繰り返すと、イエスゲイの死後、チンギスの父イエスゲイがどれくらいの数の領民を支配していたのかの叙述はないものの、次のような集団的な変化・移動が引き起こされたと考えられる。すなわち、父イエスゲイの残した、チンギス一家の支配下にいた人々の多くはタイチウド集団についていった (§73)。ジャムカはチンギス一家の支配下にあった少なくとも1万の兵を支配していた (§106)。最終的にジャムカ陣営にチンギス一家の支配下にあった人々がいるということは、チンギス一家を離れた人々はタイチウド集団についていき、ジャムカ陣営に入ったということになる⁵⁾。

次に、3.2.1. で挙げた第2の疑問点である。ジャムカは、ケレイトの王罕から命令を受けてボルテ奪還に参加していることからみると、ケレイトの王罕には反論することができない関係性であることがうかがわれる。とはいえ、ケレイトの王罕が戦場での待ち合わせの期日に遅れたことを非難する発言をジャムカが王罕とチンギスにしていることをみると (§108)、従属関係にあるとまでは言えないように思われる。おそらく、ジャムカはケレイト陣営にゆるやかに属していたとみるべきなのであろう。つまり、上記とあわせると、チンギス一家を離れた人々はタイチウド集団についていき、ジャムカ陣営に入り、さらにジャムカ陣営はゆるやかにケレイト陣営に属していた、とみなすのが妥当であろう。

この仮説に基づいて、ボルテ奪還にまつわる一連の叙述を検討すると、明示的に語られる物語とは様相を異にする非明示的物語が立ち現れてくる。次節では、その非明示的物語を提示したい。

3.2.3. ボルテ夫人奪還におけるチンギスージャムカー王罕の三者関係

3.2.2. で考察したように、チンギスが父イエスゲイから引き継ぐはずであった領民1万がタイチウド経由でジャムカ陣営に入り、さらにはケレイト陣営に入っていたとすると、ボルテ夫人奪還の際の三者のやりとりは、次のように解釈されることになる。

まず、王罕がチンギスからボルテ奪還のための救援要請があったさいに、ジャムカを明示的に突然のように動員する理由である。これは、さきに提起した第2の疑問である。王罕にしてみれば、チンギスの夫人ボルテを救援するさいには、正直なところ、チンギス自身の領民を動員してもらいたいという心理があったと考えるのが妥当であろう。しかし、その当のチンギスの領民は、その当時はジャムカの支配下にあった。もともと、この領民は、チンギスの領民であれ、ジャムカの領民であれ、同じ人々を指している。王罕は、自分の兵を使わず、ジャムカの兵一もとはチンギスの兵一を動員してもらおうという魂胆であったと思われる。

そのように考えると、王罕が、もともとチンギスがボルテの引き出物をもってきたさいに、散逸したチンギスの民を集めてやろうという発言をしたのは、チンギスの領民が、手下であるジャムカの支配下に入っているの、気安く答えたものだということになる。しかし、ジャムカは王罕の手下とはいえ、ジャムカの領民を引き抜いてチンギスに返却するほどの支配関係ではなかったの、チンギスに継承されるべきであったイエスゲイの遺民の問題はボルテ

奪還の事件まで先延ばしにされていたといえる。

このように考えると、王罕はボルテ奪還作戦において、かなり狡猾に立ち回っていることが判明する。ジャムカ自身は王罕にとっては手下であるので、ボルテ夫人の救援にジャムカを動員させる。ジャムカを動員することによって、自分の兵力を惜しむことができる。それだけではない。ジャムカを動員させる王罕のやり方は実に巧妙である。王罕はジャムカに直接的に指令を出しているわけではなく、チンギスを通してジャムカに指令を出しているのである (§ 104)。秘史からその部分を抜粋してみよう。

お前はジャムカ弟に言葉を届けよ。ジャムカ弟はホルゴナク・ジュブルにいる。私はここから2万の兵で出馬しよう、右翼となって。ジャムカ弟は2万となって、左翼となって出馬するように。われらの落ち合う場所はジャムカが定めるように [ゴシク体は筆者]。

王罕は、ジャムカ本人に直接の指令を出す、ジャムカの反感を買うことになるので、チンギスを通して指令を出しているのである。指令を迂回させる王罕の意図は、王罕がジャムカに敵対していないことをジャムカに間接的に伝えることにある。王罕が三軍をどこに集結するかをジャムカに決めさせようとするのも、同じく王罕がジャムカに敵対するものではないことを示そうとしていることと関わっているのだと考えられる。王罕の指示の出し方をみると、王罕は、チンギスとジャムカの領民の帰属の問題に関わらないようにしていることがうかがわれる。

それだけでなく、王罕は、ボルテ奪還後、チンギスとジャムカと一緒に行動せず、自分の故郷に帰ったとある (§ 115)。こうした行動をみると、王罕はチンギスとジャムカとの間の領民問題に関わることを終始回避しようとしたことがうかがわれる。

以上のように見ると、ボルテ奪還のために編成された三軍のあり方は、見かけ以上にかなり複雑なものとなっているといえる。それゆえ、**ボルテ夫人奪還後に、このイエスゲイの残した領民の帰属をめぐる、チンギスとジャムカの間に横たわる敵対関係が再燃することは必然であった**と言わなければならない。すなわち、秘史の明示的叙述においては、チンギスとジャムカの亀裂を巻3の § 118 と § 119 に置いているが、実際には、イエスゲイの死後のタイチウド集団の移動の巻2の § 72 ~ 74 あたりに遡らせなければならない。

チンギスとジャムカの力関係は、ボルテ奪還のために動員する兵士についての王罕の指示内容からみると、基本的に拮抗していたことがうかがわれる。王罕は自身の兵力として2万⁶⁾、ジャムカにも2万を拠出させようとしている。しかし、前述のように、ジャムカ軍には、イエスゲイ死後の散逸した兵が1万含まれているので、ジャムカ自身もともと支配していた兵は2万の半分の1万ということになる。つまり、チンギスがもしイエスゲイの兵を引き継いでいたら、ジャムカと同数の兵を擁していたことになるのである。

それゆえ、ボルテ奪還後に王罕が帰郷したとある § 115 に後続する § 116 で、チンギスとジャムカが、本論で着目しようとしている anda の儀礼をおこなっていることは、anda の意味を析出するに充分である。これは、チンギスの領民を奪っていたジャムカが、チンギスのボルテ夫人をとまれ救援してくれたという恩義があるので、チンギスはジャムカとの敵

対関係を一時中断して棚上げしようとした行為に他ならない。しかし、あくまでも“一時的な紳士の休戦協定”の域を超えるものではなく、強烈な敵対関係が内包されていることに留意する必要がある。

anda をこのように理解すれば、この anda の約束を交わす際に初めて言及される、幼年時代になされた anda の誓いも、明示的な意味とは全く別の意味を帯びてくる。§ 116 によれば、この最初の anda の誓いはチンギスが 11 歳のときにおこなわれたという。チンギスの父イエスゲイは、チンギスが 9 歳のときにチンギスの婚約者にボルテを選定し、その帰路で横死を遂げたことを考えると (§ 67)、チンギスとジャムカの anda の契りは、イエスゲイ死後のチンギス一家が苦難を味わっていた時期に当たる。

anda の明示的な意味である“盟友”という訳語からみると、ジャムカはチンギスの anda であったにもかかわらず、チンギスを何ら援助していないことは奇異であるように見える。しかし、非明示的には、ジャムカはチンギスの領民を奪っていたことになるので、チンギスの苦難の時代にジャムカが何ら手助けをしていないのは当然のことなのである。それゆえ、§ 116 で叙述されているように、anda の誓いを 2 回交わすということは不思議なことではない。これは anda 関係が永続的なものではないということを示している。だからこそ、勇者の間で、勢力関係が微妙なものになるときに、結び直しが必要とされるのである。

むしろここでこの解釈に反するように思われるのは、秘史には、ボルテ夫人奪還後に、チンギスとジャムカの関係に蜜月時代があったとして、次のような叙述が見えることである (巻 3 § 117)。

ホルゴナク・ジュブルの森のクルダガル崖の懐の繁茂した木々のもとで、“anda”と言い合って、親しみ合って宴を催し、楽しみ合い、夜は一つの褥に寝るのであった。

このような叙述は、明らかに、ここで議論している非明示的内容から逸脱している。上記のように、テムジンはジャムカに対して、敵対的な立場にいたと考えられるからである。このような表現は、「語り手」の意向が反映された“願望”とみるのが妥当のように思われる。以前に論じたように、「語り手」はもともとタイチウドにいて、しかもジャムカ陣営に属していた人物で、ボルテ奪還以後に両者がまた離反するとき、ジャムカ陣営からチンギス陣営にいち早く移行したと考えられる人物だからである⁷⁾。「語り手」は、チンギス陣営にいながらも終始ジャムカに忠実であったことを考えると、チンギスとジャムカが休戦状態にいたこの時期は、不安定そのものの時期でありつつも、甘い蜜のような時期であったと想像されるのである。

それゆえ、チンギスとジャムカの関係に最初の亀裂を生み出した、ジャムカの § 118 における「謎の発言」の真意がどうであれ、非明示的な流れとしては、チンギスとジャムカの対決は時間の問題であったと言わなければならない。とはいえ、ジャムカの「謎の発言」の箇所は非常に興味深いので、以下、それをみてみよう。ジャムカの「謎の発言」とは、ボルテ奪還の後にチンギスとジャムカが一年以上一緒に行動していたある日、ジャムカがチンギスに言う次のような発言である (§ 118)。

山に接して下営しよう。我らの馬飼いたちが厩屋に至るように。

河に接して下営しよう。我らの羊飼いたちや仔羊飼いたちが喉に至るように。

明示的な流れをたどると、ジャムカの言葉をチンギスは理解しかねたと § 118 には書かれている。そして、この意味を母ホエルンに聞こうとしたところ、ホエルンが口を開く前に、ボルテ夫人が、ジャムカは飽きっぽい人間であり、自分たちのことを嫌になったのだと進言し、ジャムカとは一緒に下営しないでそのまま進むことを提案する（同節）。チンギスは、このボルテの言葉を是として、そのまま進んだとある (§ 119)。

前述のように、チンギスとジャムカはそもそも敵対関係にあるので、anda の儀礼を結んだしばらくは「友好関係」を続けていたとしても、いずれは衝突していたと理解される。ここで問題は、チンギスが、馬は馬、羊は羊で別々のところに置こうというジャムカの発言を、明示的な意味で取るのか、それとも、馬と羊を別々のところに置くように、チンギスとジャムカも別々に行動しようという比喩的な意味で理解すべきなのか、その判断に迷った、ということなのであろう。比喩的に捉える場合、その意味は要するに「そろそろ anda 関係の有効期限が切れますね」という意味にほかならない。

このように解するなら、チンギスがなぜジャムカに真意を問わないのかを理解することができる。もし、ジャムカに上記のことを問うなら、逆に、チンギスがそのように考えている、すなわち、anda 関係の有効期限が終わろうとしていると考えていることをジャムカに表明することになるからである。それゆえ、チンギスは母ホエルンに打診しようとしたのだと考えられるのである。しかし、母ホエルンが答えるより前に、ボルテ夫人が決定的な答えをしてしまったために、チンギスとジャムカが分かれることになった。

興味深いことに、ジャムカの言葉の真意を直接聞けないチンギスの率直とは言えない態度からうかがえるのは、anda 関係が壊れるさいには、壊される側に立つのが正義の側に立つことになるらしいことである。このことは実は、次の (ii) のイエスゲイと王罕の関係にも言えることである。

4. B グループ及び C グループの考察

4. 1. B グループの考察

A グループの考察に沿うと、B グループの (ii) イェスゲイ-王罕関係と (iv) チンギス-セングム関係は次のように解釈できる。

4. 1. 1. (ii) イェスゲイ-王罕関係

anda を、A グループの考察で検討したように、ゆくゆくは対決が避けられないものの、しばしの間休戦状態にしておく関係のことであるとすると、イエスゲイと王罕の関係は次のように考えられることになる。両者の関係性は、常に“回顧”という形で叙述されており、しかも、同じ内容が何度も繰り返されているというのが特徴的である。表 2 に示したように、この関係性は、(1)、(2)、(14)、(15)、(17)、(21) の節で叙述されている。

表 1 (1) の巻 2 § 96 では、チンギスが妻ボルテの引き出物を献上しに王罕のもとに行く

場面であるが、イエスゲイと王罕が *anda* 関係にあったことが語られている。これは、次のようなものである。

セングル河から移動して、ケルレン河の源、ブルギの岸に居をかまえて下営し、「母チョタンの引き出物」と言ってクロテンの毛皮を持ってきていた。その毛皮をテムジン、カサル、ベルグテイの3人が持って行き、昔日、イウスゲイ・カンなる父とケレイトの王罕は *anda* と言い合っていたので、「我が父と *anda* と言い合っていたのは、父のようなものである」と言って、王罕がトーラ河のカラ・トゥンにいと知りそこに赴いた。

この節で、*anda* という語はもう一度出現しているが、それはチンギス自身が上記のイエスゲイと王罕との *anda* 関係を王罕に言う説明の中においてである。上記の抜粋のなかで注目すべきことは、ここでイエスゲイという名前に、*qan* カンが付いていることである。これは、ケレイトの王罕すなわち *Ong_qan* の *qan* と同じ称号である。それゆえ、*anda* の意味を考える場合、イエスゲイに *qan* という称号がついていることは非常に意味あることとなる。

一般に、秘史におけるチンギスの父は、多くの場合、*Yisügei_ba'atur* (イエスゲイ・パートル) すなわち“イエスゲイ勇者”と認知されており、*Yisügei_qan*(イエスゲイ・カン) すなわち“イエスゲイ王”とは認知されていない。しかし、実は、栗林均編『元朝秘史』モンゴル語 漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』(2009)に基づくと、この認識は改められる必要がある。なぜなら、チンギスの父イエスゲイが“イエスゲイ勇者”を表す *Yisügei_ba'atur* と書かれている事例が16例あるのに対し⁸⁾、“イエスゲイ王”を表す *Yisügei_qan* と呼ばれる例は計12例もあるからである⁹⁾。(1)でもイエスゲイは王罕(オン・カン)との関係で“イエスゲイ・カン *Yisügei_qan*”と言及されているのである¹⁰⁾。

次の事例である表1(2)の巻3 §104は、チンギスがボルテ夫人奪還のための救援を王罕に乞う場面を内容としているが、「父の時代の *anda* と言い合ったのは、実の父のようなものだ」と王罕は(1)の場面での叙述と同じことを繰り返している。

次の事例は、(1)や(2)とは離れて、表1の(14)(巻5 §150)である。ここでは *anda* という語が3回出てくる。この節は、前述の(1)や(2)で叙述される、王罕とチンギスの父イエスゲイがどのような経緯で *anda* になったのかの説明を主な内容としている。ここで重要なことは、この説明によると、王罕の窮状をイエスゲイが救援したことにより *anda* となったという説明があることである。

ここで着目できるのは、“*anda*”関係が、イエスゲイの立場が王罕よりも優位に立ったときに結ばれていることである。(14)(巻5 §150)においては、王罕とイエスゲイの称号は、*qa'an* と *qan* の2種類で現れるが、興味深いことに、両者が近接している箇所においては、両者に同じ称号が付されている。少し、長いが、重要なので、§150を小沢重男『元朝秘史全訳(下)』(1981年)に基づいて以下に訳出しておきたい¹¹⁾。ゴシック体の部分は両者に *qahan*、下線部の部分は、両者に *qan* という称号がそれぞれ付されていることを示したものである。

その後、チンギス・カハン qahan のところにケレイトのジャカ・ガンボがテルスドにいるときに友となるためにやってきた。彼が来たとき、メルキトが戦いに来たので、チンギス・カハン qahan、ジャカ・ガンボたちは（メルキトと）戦い合って退却させた。そのとき、一万のトゥベゲン、多くのトゥンガイドたち、四散したケレイトの民もチンギス・カハン qahan のもとに入ってきた。ケレイトのオン・カハン qahan [王罕のことを指す—筆者注] は、以前イエスゲイ・カハン qahan のときに、よく平和裏に過ごしているときに、イエスゲイ・カン qan と “anda” と互いに言い合ったのであった。“anda” と互いに言い合ったことわりは、オン・カン qan は自分の父であるクルチャクス・ブイルグ・カンの弟たちを殺したので、グル・カンなる父方のオジと反目しあって、アラウン山峡に追い込まれて、百人が逃れ出てイエスゲイ・カン qan のところに来ると、イエスゲイ・カン qan は彼を自分のところに来られて、自ら軍を率いて、グル・カンを河西のほうへ追いやり、彼の人衆や散民をオン・カン qan にもどしてやったので、“anda” となりあったのである。

以上のように、qan や qahan という称号に着目する限り、“anda” 関係を説明する際に、力関係を示す称号がイエスゲイと王罕で統一されていることは注目してよい¹²⁾。この拮抗した力関係は次のようなことから知ることができる。先に述べたように、ケレイトの王罕がボルテの奪還のための救援要請をテムジンから受けた時、すぐにジャムカ弟に軍隊を出させるように言っているが、王罕がそうしたのは、ジャムカの兵士たちの中には、テムジンの父イエスゲイの支配していた 1 万の兵士が含まれていたからだという理由がある。王罕の 2 万の兵には弟の兵が半分含まれていたこと、そして、ジャムカの 2 万の兵のうち少なくとも 1 万はイエスゲイの兵だったことを考えると、かつて王罕とイエスゲイの力関係は拮抗していたことを示しているのである。

つまり、上記の § 150 で両者の称号を近接する箇所では qahan か qan に揃えているのは、一方を他方よりも優位に置かないようにしようという、イエスゲイと王罕に対する“配慮”が働いたと見てよい。そして、この配慮とは、イエスゲイはケレイトの王罕の部下であったが、イエスゲイの力は王罕に勝ったので、ほぼ両者の力関係は拮抗してしまったことに関係していると考えられる。それゆえ、ここでも、“anda” 関係はこのような不均衡を調整するための、とりあえずの一時的な休戦関係という意味を持っていたといえる。§ 150 の節の内容は、ケレイト内部における親族内の王位継承争いについてであり、親族内部でも殺し合いがなされていることが明示されている。このことを考えれば、親族でもない間柄で臣従関係をもっていた王罕とイエスゲイの上下関係が微妙になったとしても不思議ではない。

しかし、王罕への配慮は実はそれほどなされているわけではない。なぜなら、王罕に qahan という称号が付されるのは、実はこの § 150 における一箇所だけだからである¹³⁾。しかも、この § 150 では、チンギス・カハン、イエスゲイ・カハン、オン・カハンというように、同時に三者がカハンという称号が付されているので、王罕に付されたカハンという称号には、あまり重要な意味が込められていないと言わざるをえない。このような叙述をみると、明らかに秘史における王罕の扱いは好意的ではないといえる。

次の事例の (15) すなわち巻 5 § 151 は、イエスゲイ時代ではなく、チンギス時代の話に

なっている。この § 151 は、前節の § 150 の内容と一見似ている。なぜなら、王罕は親族と殺し合いをするという揉め事を起こし、ナイマンや西遼に逃げ込むがそこでも敵対し、最終的にチンギスに助けられているからである。そこでチンギスが王罕を助けるのは、父イエスゲイと王罕とがかつて“anda”関係にあったからだと言っている。しかし、チンギスはこの節では明らかに王罕よりも優位に立っていることが観察される。実際、両者に付されている称号をみると、この節においては、チンギスには一貫して qahan が付されているのに対し、王罕には一貫して qan が付されており、称号的にもチンギスのほうが王罕よりも優位にあることが示されているのである。すなわち、ここでは名実ともに、**チンギスが王罕よりも優位に立っていることが観察される**。それゆえ、この § 151 の内容は、前節の § 150 とはかなり異なっていることになる。前節では、チンギス、イエスゲイ、王罕に qahan という称号が同時に付されているのに対して、この節においては、**チンギスにのみ qahan と付されており、王罕には qan という称号しか付いていないので、王罕の地位が下がっていることが観察される**のである。にもかかわらず、重要だと思われるのは、チンギスが王罕にしてやる行為や称号どちらをとってもチンギスのほうが優位に叙述されているにも関わらず、チンギス－王罕関係が、チンギスの父イエスゲイと王罕の“anda”関係に縛られていることである。この背景には、前述のように、かつてイエスゲイが王罕の配下であったにも関わらず、両者の力が拮抗してしまい anda 関係を結んだものの、両者で最終的な決着がつかないうちにイエスゲイが他界してしまったことにより、チンギスが非明示的には王罕の配下であったことに関係しているのではないかと推測される。

次の事例は (17) すなわち巻 5 § 164 である。ここでは、王罕がナイマンに自分の息子のセングムの妻子や民を略奪された窮状をチンギスに助けてもらったという内容が叙述されている。この節では anda が 2 回登場しているが、1 度目は、息子の窮状を救ってもらった王罕がチンギスに感謝する言葉の中で用いられている。すなわち、昔、イエスゲイ・アンダ (anda) が自分の散り散りになった民を集めてくれたことに言及されている。2 度目の anda という語も、王罕の言葉の中で現れる。そこにおいては、王罕は、イエスゲイと自分が anda であったことに触れ、この anda 関係ゆえに、チンギスと父子関係になりたいと言う。この節においても、**チンギスには qahan、王罕には qan という称号が付されている**。特筆すべきことは、王罕がチンギスとの関係を、“anda 関係”ではなく、“父子関係”にしようとしていることである。そして、これに合わせるように、王罕はチンギスを兄とし、自分の息子を弟とすることを提案し、彼らは父子関係の契りをしたと叙述されている。ここで重要なことは、王罕が自身の老いに触れ、自分の死後、自分の民人を誰が治めるかという文脈でチンギスとの父子関係の話になっていることである。これだけを見れば、チンギスを後継者に指名したといえる。だが、実際は、セングムとチンギスとを兄弟にさせていることをみれば、王罕は自分の後継者としてチンギスと自分の息子セングムの両者を同時指名したということになる。

このことは、イエスゲイが王罕の配下にあったということを前提に考えれば、不自然な展開ではない。

最後の事例である (21) すなわち巻 6 § 177 には、anda という語は、チンギスが王罕に

託した言葉の中で3度現れている。1度目は(14)の§150、2度目は(15)の§151、3度目は§(17)の§164の内容と同一である。つまり、すべて内容的に新しいものではないので、ここでは割愛する。

4.1.2. (iv) チンギスーセングム関係

(iv) チンギスーセングム関係の考察に入る。この関係は、表2の(iv)に拠ると、(24)と(29)に現れる。表1の(24)を見ると、(24)巻6§181にandaという語は計6回登場し、そのうち4回では、チンギスがセングムをそう呼んでおり、1回はチンギスにandaと呼ばれたことに憤慨するセングムがandaであることを否定するという言葉の中で現われている。最後の1回は、チンギスの発話の中でジャムカを指して言っている。一方、(29)のほうは、表1に拠ると、巻8§204に1回モンリグ・エチゲへの発話の中でチンギスがセングムのことをandaと言っている。

4.1.1. で考察したように、(15)における称号の付され方をみれば、チンギスは王罕を凌駕していることがわかる。(16)における称号の付され方も(15)を踏襲しているので、チンギスが王罕よりも優位に立っていることが理解される。それゆえ、(17)すなわち§164の考察では、王罕は、チンギスと父子関係の契りをし、王罕が後継者としてチンギスを指名しなければならない状況に追い込まれたと読める。とは言いつつも、王罕は息子セングムをチンギスの弟とすることで、セングムが後継者となる余地も多少残したと言える。しかし、チンギスとしては、すでに王罕が権力をチンギスに譲歩した段階において、その息子セングムに権力の余地が少しでも残されるというようなことは制止したいところであらう。

それゆえ、(24)と(29)いずれの場合も、anda理解の仮説を応用することができる。すなわち、チンギスとしてみれば、セングムは一時的に休戦すべき相手ではあるが、いずれは倒さなければならない相手であるので、チンギスが、セングムをandaと呼ぶことは相応しいのである。つまり、チンギスがセングムをandaと呼ぶという行為は、チンギスがセングムに“挑戦状”を突きつける行為と同義だということになる。

一方、セングムの立場から見れば、チンギスはあくまでも王罕の手下、すなわち、ゆくゆくは王罕の息子である自分の手下でなくてはならない存在にも関わらず、自分をandaというような挑戦状を突きつける振る舞いに対して怒りを覚えたということなのであろう。

4.1.3. 小括

Bグループの考察を整理しよう。秘史におけるanda関係は、やはり基本的に敵対関係にある人物同士が一時的に休戦することを取り結ぶ取り決めだと解釈しておくことができよう。この場合、チンギスーセングム関係はそれ以前の世代のチンギスの父イエスゲイー王罕関係の延長としてとらえることができる。王罕とイエスゲイのanda関係が言及されるとき、それは常にイエスゲイが王罕を助けるという文脈においてであることは重要である。なぜなら、王罕はイエスゲイとの関係で危機的な関係にあり、anda関係という関係にしなければ、均衡が崩れてしまうということだったと理解できるからである。

4.2. Cグループの考察

Cグループの考察の対象は、(vi) ジャムカを qahan カハンに推戴した諸集団の武将たち関係 (vi) である。これは、表2に拠れば (13) であり、表1の (13) すなわち巻4 §141に該当する箇所である。表1に記載したように、ジャムカの支持者たちが“andaqaldu-ju(andaとなり合って)”ジャムカを“カ qa”(ここでは一応カハン qahan と同義と解しておく)に推戴するという内容の中で anda の派生語が現われている。

この場合、anda 理解の仮説を応用するならば、明示的な意味とは異なる意味が立ち現われてくる。すなわち、ジャムカを“カ qa”に推戴した支持者たちは、実際には、当面のところジャムカをカハンとして立てるだけであって、あくまでも一時的な休戦状態にすぎない、という意味が立ち現われてくるのである。ジャムカを“カ qa”に推戴したことを内容とするのは巻4の §141 であるが、この節は重要なので、下記に前半部分を小沢訳に基づいて訳出しておく。

①カタギンの Baqu_Čorogi を頭とするカタギン、②サルジウトの Čirgidai_bayatur を頭とするドゥルベン・タタル、③ドゥルベンの Qaji'un_Beki を頭とする者、④タタルのアルチ・タタルの Jalin_Buqa を頭とする者、⑤イキレスの Tüge_Maqa を頭とする者、⑥オンギラトの Dergek、⑦ Emel、⑧ Alqui+tan、⑨ゴロラスの Čonaq[=Čoyoq] を頭とする者、⑩ナイマンからグチュウト・ナイマンの Buyuruq_qan、⑪メルキトの Toqto'a beki の息子 Qutu、⑫オイラトの Quduqa beki、⑬タイチウドの Tarqutai_kiriltuq、⑭ Qodun örceng、⑮ A'uču_ba'atar+tan のタイチウドたちが、アルコイ・ボラで集まってジャダランのジャムカを“カ qa”に推戴しようと言って、牡馬、牝馬を共に切り、anda となりあって、そこからエルグネ河を下って、ケン河がエルグネ河に注ぐ河洲の広い湾曲部においてジャムカをそこに「普き王」に推戴した [ただしゴシック体及び①～⑮の番号は筆者]。

Aグループの anda 概念に基づく、上記の①～⑮の武将たちが互いに anda となりあったというから、彼らは、共通の敵のために、互いにライバル同士であったにも関わらず休戦状態になって、ジャムカをとりあえず推すことにしたということになる。つまり、ジャムカのライバルであるということは、この人物たちがその後どうなったかという顛末は、anda についての考察においても意味があることになる。そこで、①～⑮までの人物についての秘史における頻度を栗林 (2009) に基づいて以下に記すことにする。

このうち、①、②、③、⑤、⑧、⑨の6名は、秘史において1箇所のみ言及されているので、考察できない。④のアルチ・タタルの Jalin_Buqa は、巻1 §58 に登場する Jali_Buqa と同一人物と考えられるが、この人物はこの2つの節以外に登場しないので、その後の顛末は追えない。オンギラトの⑦と対になっている⑥ Dergek は、§176 の Terge と同一人物と考えられるので—ここでも Emel と対になっている—、2回登場する。⑦の Emel も⑥と同様に、§176 に登場するので2回登場する。彼ら Dergek と Emel は §176 で、チングス陣営のウルウトのジュルチェデイに降ったという内容が記されている。

⑩のナイマンの Buyuruq_qan は秘史に13回言及されているが、この人物は、巻5 §158 で

チンギス軍に殺害されたとある¹⁴⁾。

⑪ Qutu は秘史で計 7 回言及されており、巻 10 § 236 でチンギス陣営のスペテイに殺害されたとある。この人物の 2 人の後のうち、ドレゲネは巻 8 § 198 で第二代皇帝オゴタイに与えられたとある。さらに、この人物の父である Toqto'a beki もこの § 198 でチンギス陣営の流れ弾に当って戦死したとある。Toqto'a beki はかつてチンギスの妻ボルテを奪った一団に入っていた人物である (巻 2 § 102)。

⑫ Quduqa beki は巻 10 § 239 においてチンギス陣営に降ったとある。

⑬のタイチウドの Tarqutai_kiriltuq は、バアリンのナヤアの主君であったらしいが、ナヤアがチンギス陣営に降るさいに解放される人物である (巻 5 § 149)。

⑭ Qodun örceng は秘史に 3 回言及されている。そのうちの 1 回は、Qotun_ örceng とあるが、引用した § 141 の表記の人物と同一人物とみてよいだろう。上記の節以外の 2 回は、巻 4 § 144 と巻 5 § 148 である。§ 144 では、⑭は、⑩、⑪、⑫、そして⑮の武将らとともにチンギス-王罕連合軍と戦っているとある。§ 148 では、この人物はチンギス軍に殺害されたとある。

最後の⑮ A'uçu_ba'atar+tan は、秘史に計 7 回言及されている。それらは、引用した § 141 での 1 回以外に、巻 4 § 142 に 1 回、巻 4 § 144 に 4 回、そして巻 5 § 148 に 1 回である。しばしば⑭と対に登場しているが、最後の言及箇所である § 148 で⑭とともにチンギス陣営に殺害されている。

2 度以上言及されている武将たちについて言えば、④のアルチ・タタルの Jalin_Buqa と⑬のタイチウドの Tarqutai_kiriltuq 以外は、最終的にチンギス陣営に投降するか (⑥、⑦、⑫)、殺害されている (⑩、⑪、⑭、⑮)。最終的顛末が追えないとはいえ、④のアルチ・タタルの Jalin_Buqa と⑬のタイチウドの Tarqutai_kiriltuq は、どちらもチンギス陣営に滅ぼされる集団に属している。すなわち、1 回しか言及されていない武将については不明であるが、**他のジャムカを推薦した武将たちはすべて死亡するか投降するかの敗者となっていることが観察される。**この二者択一の過酷な顛末は、彼らがジャムカと anda となりあったことが、間接的にチンギスと anda 関係となり、その結果、最終的にチンギスに投降するか殺害されるという結末に至ったことを示しているといえる。

5. D グループの考察

5. 1. チンギスのライバルとしてのクイルダル

最後の D グループは (iii) チンギス-クイルダル関係である。表 2 に拠れば、(iii) チンギス-クイルダル関係は、表 1 の (20) の巻 6 § 171、(30) の巻 8 § 208、(31) の巻 9 § 217 において言及されている。

(20) の出現する § 171 ではクイルダルは計 5 回言及されている。ここでは、クイルダルは直接“anda”と呼ばれておらず、クイルダルがチンギスに次のように発言することから、チンギス-クイルダル関係を“anda”とみなしたものである。この箇所は非常に重要なので、当該節の冒頭部を訳出しておく。

この言葉をもってこさせて、チンギス・カハンが言うのに、「ウルウトのジュルチェデイ

伯父、お前はどんなことを言うか、お前を先鋒軍としたい」と言った。ジュルチェデイが言葉が発する前に、マンガトのクイルダル・セチェンが言うのに、「**アンダの前に私が戦い合おう**。後に、私の孤児たちの世話をアンダがしてくれるように」と言った [ゴシック体筆者]。

クイルダルの言葉は、ケレイトの王罕との決戦に際してのものであるから、Aグループの考察に基づけば、この状況下でのクイルダルの発言は意味深長なものとなる。なぜなら、“anda”とはライバル関係にある勇者の間で結ばれる紳士的な休戦協定であるから、クイルダルがケレイト戦の前に、チンギスを“anda”と呼ぶことは、挑発行為となるからである。クイルダルは、対ケレイト戦で戦功を立てた暁には、自分がケレイトの王罕の代わりに支配者となることがありうることを、自らチンギスに予告している行為となるのである。クイルダルは、ウルウトのジュルチェデイと対で言及されることが多いのであるが、“anda”の言葉に注意を払うと、ジュルチェデイの態度はクイルダルとは明らかに対称的に叙述されていることが観察される。前述のクイルダルの発言の直後にジュルチェデイは次のように叙述されている (§ 171)。

ジュルチェデイの言うのに、「**チンギス・カハンの前に我らウルウト、マンガトが戦い合はん**」と言った [ゴシック体筆者]。

クイルダルはチンギスに対して「**andaの前に戦い合おう**」と言っているのに対し、ジュルチェデイはチンギスに対して「**チンギス・カハンの前に戦い合おう**」と言っているのである。ジュルチェデイとしては、クイルダルがチンギスに対して挑発的態度に出たので、対に言及されることの多いジュルチェデイとしては、チンギスに対して自分がチンギスの“anda”になるつもりはないことを申し出しておかなくてはならなかったと推測される。

次に、“anda”に絡むチンギス―クイルダル関係の次の事例 (30) すなわち巻8 § 208を見よう。ここでは、明確に“クイルダル・アンダ Quildar_anda”と表現されている。§ 208ではチンギスがジュルチェデイの勲功を評価し、その勲功に報いて与える恩賞についての言葉で埋め尽くされている。とくに、冒頭部でチンギスが対ケレイト戦におけるジュルチェデイの勲功を次のように表現していることは注意を引く (§ 208)。

また、チンギス・カハンがジュルチェデイに言うのに、「お前の主たる勲は、ケレイトとカラカルジト砂漠で戦い合って憂慮しているとき、**クイルダル・アンダがその先鋒を申し出た**。しかし、**その勤めはお前がおこなったのだ** [ゴシック体筆者]。

前述の (20) の考察の延長上では当然とも言えるが、ここでチンギスは、対ケレイト戦での勲功を、クイルダル・アンダではなく、ジュルチェデイに帰している。ここにおいては、チンギスを“anda”呼ばわりして挑発したクイルダルとは違って、チンギスに忠誠を誓って戦ったジュルチェデイへのチンギスの感謝の気持ちが込められているといえる。

チンギス―クイルダル関係の最後の事例である (31) すなわち巻9 § 217を見よう。ここ

でも“クイルダル・アンダ Quildar_anda”と表現されている。秘史においてはクイルダルという名前に計7回触れられるが、この § 217 はその最後の事例となる。§ 217 は短いので全文を引用しておく。

また、チンギス・カハンの言うのに、クイルダル・アンダは、合戦の日に、己が命を賭して、**「先に口を開きたる」**勲功ゆえに、子々孫々に至るまで、「孤児たちの賜物」を取るとよい」と勅命があった [ゴシック体筆者]。

ここでは、一見すると、前述の (30) とは反対に、チンギスが対ケレイト戦におけるクイルダルの勲功を評価している。確かに、クイルダルはチンギスを“anda”と呼んで挑発したとはいえ、対ケレイト戦でおそらくしり込みしたであろう武将たちの先頭を切って戦う士気を見せた点で—その上戦死してもいる点で—評価できる面もある。しかし、チンギスの発言をよく見ると、チンギスはクイルダルの勲功を「先に口を開きたる」というところに認めており、ケレイト戦において雄雄しく戦死したことに対してではない。ここにはチンギスのクイルダルに対する毒のある皮肉が端的に見て取れる。つまり、チンギスを“anda”と呼んで挑発したクイルダルに対する秘史の叙述は、(20)、(30)、(31) のすべてに一貫していると言えるのである。

Aグループの anda 理解を敷衍すると、明示的に描かれる、チンギスに忠実であるクイルダル像とは全く異なるクイルダルの姿が立ち現れてくることになるのである。この非明示的な意味を踏まえて、クイルダルが死に至る際の叙述を見ると、興味深い。クイルダルは § 175 において次のように叙述されている。

・・・(中略)・・・このように移動してくるとき、食料のために巻狩りに行き、クイルダルは自分の傷がまだ癒えないうちに、**チンギス・カハンに止められたのをおして、獲物をとりに走り**、病が重くなって亡くなった [ゴシック体筆者]。

明示的に読めば、この場面は、部下を労わるチンギスの姿と、なぜか無理をして命を落とす部下クイルダルという構図になっている。この場合、クイルダルがなぜ無理をしたのかは不明なまま残る。しかし、“anda”という観点から見ると、明示的な関係性とは全く異なる物語が立ち現れてくるのである。この場合、クイルダルは対ケレイト戦で負傷したので、チンギスとの anda 関係は雲散霧消してしまったと想像される。それを暗示するかのように、この場面においては、クイルダルは単にクイルダルであって、クイルダル・アンダ (anda) とは表現されていない。一度は“anda”としてチンギスと覇権争いをしようとしたクイルダルにしてみれば、自分の食料をチンギスに労わられて供給されるという事態は、この人物の自尊心が許さなかったと考えられる。それゆえ、この場面は、明示的には、チンギスに止められたにもかかわらず、とあるが、非明示的には、むしろチンギスに止められたからこそ、クイルダルはあえて無理を重ねて自滅したと読むべきなのであろう。

上記以外の箇所では、anda とは関係なく、クイルダルに言及されているのは、巻4 § 130

で1回、巻6 §185で7回、巻8 §202で1回、巻9 §209で1回である。以下、順に考察しよう。

§130ではクイルダルには1回しか触れられていないが、これは重要である。なぜなら、この節で、クイルダルとジュルチェデイはそれぞれマンガトとウルウトを引き連れて、ジャムカのもとからチンギス陣営に移動したと叙述されており、チンギスが「ジャムカのもとよりこれほどの人々が来た」と発言しているからである。つまり、クイルダルやジュルチェデイはもともとジャムカ陣営にいたことが明示されているので、彼らは、チンギス陣営の中でも外様の存在であったことがうかがえるのである。

次の§185では7回現われる。この節では、チンギスがクイルダル亡き後のクイルダルの妻に、ケレイト側からチンギス側に投降したジュルキンのカダク・バートルを与えるという内容が叙述されている。カダク・バートルは王罕とセングムを逃がした上でチンギスに投降しており、それが評価されてのことであった。しかし、カダク・バートルがクイルダルの妻に与えられたことがいかなる非明示的意味を帯びるのかは本考察においては不明である。

§202ではクイルダルには1回のみ触れられている。この節では、チンギスがカハンに推戴され、その後チンギスが千戸長を任命する叙述となっている。クイルダルは、そこで21番目に千戸長に任じられている。前述のように、クイルダルは§175で戦死しているのに、なぜここで千戸長の名前として登場しているのかは不明である。

クイルダルに触れられる最後の事例である§209では、チンギスがクビライに言う台詞の中で現れている。クイルダルの名前は、クビライを含む四犬と呼ばれる勇者の名前、ポオルチュなど四馬と呼ばれる勇者の名前に言及されたあとに、ジュルチェデイとクイルダルの名前が続いて触れられている。ここでは、チンギスがこれらの勇者を評価するという内容になっている。§202と同様に、ここでもクイルダルは既に戦死しているのに名前だけが触れられる。この理由は不明である。

以上の、§185、§202、§209におけるように、クイルダルに言及される箇所には不明のことも多いが、少なくとも§130で、この人物がもともとジャムカ陣営にいたことが確認できたことは、andaについての考察においては意味あるものとなる。

5.2. 小括

5.1. でみたように、マンガトのクイルダルは、明示的には、対ケレイト決戦においてチンギスに忠誠を尽くして果敢に戦った結果、戦死した人物として描かれているのであるが、Aグループの考察で提起したanda理解を応用すると、非明示的には全く異なるクイルダル像が立ち現れてくる。すなわち、クイルダルは、対ケレイト戦の直前に、チンギスをandaと呼ぶことによって、チンギスに勝負を挑み、もしケレイト戦で武勲を立てたときには、チンギスと同様の力を得たものとして、チンギスと覇権を争う意向であった。にもかかわらず、戦闘中に負傷したため、このチンギスとの決戦は自然消滅することになった。最終的に、この人物は、チンギスの労りを拒否したために、むしろ自滅する道を選んだということになる。クイルダルについての考察はanda理解を応用してなされたものであるのではあるが、非明示的なanda理解に基づいた、この人物のチンギスとの関係における明示的意味と非明示的

な意味との鮮やかな対比性は、A グループの anda 理解の妥当性を逆照射するものとなっていると言えよう。

6. 結論

本論の要点をまとめると、次のようになる。まず、anda という語が秘史において現れる全ての事例を拾い上げれば、この語はごく限られた人々の間にしか用いられていないことがわかる。次に、anda で示される関係は7つあることを示し、その7つをさらにA～Dまでの4つのグループに整理し、そのグループを順次考察した。とくに、Aのグループの考察は、その他の3つのグループを考察するための仮説を提起したという意味で重要なものである。

Aグループは、(i) チンギス-ジャムカ関係、(v) ジャムカ-チンギス-王罕関係 (vii) 王罕-チンギス関係が含まれる。この場合、チンギス、ジャムカ、王罕は絡み合って登場するので、この三者をひとつのグループとして括っておいた。順列組み合わせからいくと、ジャムカと王罕の関係があってもよさそうなのであるが、ジャムカと王罕は、秘史においては、一度も anda 関係として叙述されることはないことも指摘しておいた。Aグループの議論でまず重要なことは、チンギスの正妻ボルテがメルキト集団に略奪されたときにジャムカが動員する兵士2万のうち1万はチンギスの兵士だったらしいことである。ジャムカは、この1万をチンギスの兵だと言いつつも、ジャムカ自身で統括していることが明示的に記されている。ジャムカの兵士のなかにチンギスの兵士が含まれている背景には、イエスゲイの死後、イエスゲイの支配下にいた民がタイチウド集団経由でジャムカ陣営に吸収されたことが関係している。チンギスはボルテの救援にジャムカではなくケレイトの王罕に依頼しているのであるが、本来はチンギスに帰属するはずであったイエスゲイ遺民がジャムカ陣営に吸収されていたので、王罕はジャムカをこの救援事件に巻き込んで、ジャムカの兵を出させようとしていたのである。ケレイトの王罕にしてみれば、ボルテの救援には、できるだけ自分の軍を動員しないでチンギスの兵士たちでやってもらいたいという本音があったものと思われる。

つまり、以上から、チンギス、ジャムカ、王罕の三者関係には、次のような非明示的關係があったと推測されるのである。すなわち、チンギス一家を離れた人々はタイチウド集団についていき、ジャムカ陣営に入り、さらにジャムカ陣営はゆるやかにケレイト陣営に属していたということである。このような三者関係をもとにすると、チンギスとジャムカは明らかに秘史の叙述の最初から敵対している関係であることが判明する。それゆえ、ボルテ夫人奪還後は、しばらく anda の儀礼をおこなって一時的な休戦協定を結んでいたものの、両者の敵対関係が再燃することは必至であった。それゆえ、チンギスとジャムカの陣営が分かれる契機となった、§118でのジャムカの謎の発言は、andaの有効期限についての問いだったのか否かという点にチンギスの逡巡の本質があったといえるのである。この問いの真意がどちらにあったのかは依然として不明であるが、いずれにしても、チンギスとジャムカがいずれ決裂することは避けられないことであったと考えられる。

こうしたAの考察に基づく、次のBグループのイエスゲイ-王罕関係やチンギス-セングム関係はすべて説明しうるものとなる。とくに、イエスゲイ-王罕が anda 関係を結んでいる文脈においては、常にイエスゲイが王罕を助けていることを指摘し、両者の勢力の均衡

が崩れ、イエスゲイが王罕よりも優位に立っているときに anda 関係が結ばれていることに注意を促した。王罕の息子セングムとチンギスの関係においては、セングムは父である王罕の権威をかさにきて、チンギスを手下であるとみなしていたために、チンギスに anda と呼ばれたさいに激昂したのだと推測される。

続く C グループはジャムカをカ qa に推挙した諸集団の武将たち同士の関係であるが、A の考察に基づくと、ここで名前の挙げられている 15 名の武将たちは、チンギスという共通の敵のために、互いにライバル同士であったにも関わらず anda 関係に互いになることによって休戦し、ジャムカをとりあえず推すことにしたということになる。このうち 6 名は秘史に一度しか登場しないためにそれ以上の考察は難しいのであるが、それ以外の人々はすべて死亡するか投降するか敗者となっていることが観察された。二者択一のこの過酷な顛末は、彼らがジャムカと anda となりあったことが、間接的にチンギスと anda 関係となり、その結果、最終的にチンギスに投降するか殺害されるという結末に至ったことを示している。

最後の D グループは、チンギスクイルダル関係の考察であるが、ここでも A グループの考察に基づくと、明示的にはチンギスの勇敢な配下としてのみ登場しているクイルダルであるが、やはり非明示的には、チンギスに対して敵対的な関係にあったことを描き出すことができた。興味深いことに、クイルダルのチンギスへの挑発は最終的な対ケレイト戦の前におこなわれていることが観察され、本論の anda 理解が最終的にチンギスとケレイトの王罕との関係に収斂していくさまを再確認することができたといえる。

以上から、秘史における anda 関係とは、明示的には親密な関係性として示されているが、非明示的には全く逆の、いずれは勝敗がつけられなければならないものの、一時的な休戦状態にある関係だと理解することができる。明示的にこの関係が示されなかった背景には、チンギスが父イエスゲイの時代から、長期にわたってケレイト集団の傘下に組み込まれていたことが大きく関係し、チンギスが台頭してく初期の段階においては、ケレイトの王罕と敵対関係にあったことが隠蔽されねばならなかった事情があるものと考えられる。

注

- 1) 秘史においては、アンダの傍訳は「契合」となっている。anda 概念については、磯野富士子の「アンダ考」『東洋学報』第 67 巻、57-80 頁の論考があるが、この論においても、アンダ関係に親密性を想定している。本論では、こうした親密性を否定しているが、磯野論文と共通したところもある。磯野論文では、アンダが欧米文献でしばしば sworn brothers と訳されることに異を唱え、義兄弟や僚友と訳されるヌフルなどとは異なり、アンダは対等な関係性を意味していたという論を展開している。ただし、磯野論文は、アンダ概念を検討する際に、秘史のほか、集史や元史をはじめとする各種の史書を参照しており、あくまでも秘史を歴史文献のひとつとして扱っているので、本論における秘史を「英雄叙事詩」と位置づけ構造分析した研究とは異質のものである。
- 2) 栗林均編『「元朝秘史」モンゴル語 漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北アジア研究センター叢書第 33 号、東北大学東北アジア研究センター、2009 年。
- 3) トオリルとは、王罕のことを指す。金朝の要請で、タタルを討った後、金朝の宰相であるオンギン・チンサンから「王罕」の称号をもらったと秘史の巻 4 § 134 にある。本論では煩瑣になることを避け、一貫して「王罕」と記述している。
- 4) 秘史の「語り手」がジャムカに終始忠誠を尽くしていたらしいことについては、藤井真湖『「元朝秘史」の地の文における「我々」表現に隠された意図 - 巻 3 第 110 節～巻 11 第 263 節における一人称複数形についての考察 - 』『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 7 号、2011 年、45 - 66 頁を参照。
- 5) 「語り手」= ナヤアもその一人であると考えられる。詳細は、Чингис Хаан Ба Монголын Эзэнт Гүрэн: Түүх, Соёл, Өв (Олон Улсын Эрдэм Шинжилгээний) VХурал 2012.07.24-26. Улаанбаатар

хот), Редактор: Д. Шүрхүү, Б. Хүсэл, Иманиши Жүнко, Б.Сэржав, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав, Хэвлэлд бэлтгэсэн: А. Сосорбурам, М. Болормаа, 2013 он. pp. 112-140. を参照。

- 6) 実際には、ジャカ・ガンボという弟の軍が1万入っている。
- 7) 詳細は藤井真湖前掲論文（2011年）の47 - 49頁を参照されたい。
- 8) 栗林前掲書（2009年）527頁を参照。この16例の中には、Yisügei_ba'adur も1例含まれている。
- 9) 栗林前掲書（2009年）527頁を参照。この計11例の中には、Yisügei_qan という表現のみならず、Yisügei_qa'an や Yisügei_qan_ečige という表現も含まれている。
- 10) ただし、実は、王罕はイエスゲイの存命時代には、まだ王罕とは呼ばれていないはずで、名前としては、それ以前のトオリル罕の名前であるべきはずだが、(1)の巻2 § 96 では王罕となっていることを指摘しておく。
- 11) 小沢重男『元朝秘史全訳（下）』風間書房、1981年、206 - 207頁。
- 12) したがって、歴史学での qahan/qan の用法とは一致しないということが起こってくる。歴史学では qan は並列軸に複数存在する君主の意として用いられるのに対して、qahan は垂直軸の頂に立つ唯一の君主の意として用いられるからである。
- 13) 栗林前掲書（2009年）330頁を参照。
- 14) § 158 におけるこの Buyuruq_qan が殺害された叙述については、藤井前掲論文（2011年）でも議論したように、この人物を殺害したのが誰かについて曖昧である。ちなみに、この議論では、「語り手」のナイマンへの配慮があったとした。